

日本の受容から見るカール・ツツクマイヤー作品の 多様性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19459

日本の受容から見る カール・ツックマイヤー作品の多様性

Die Verschiedenartigkeit der Werke Carl Zuckmayers am Beispiel ihrer Rezeption in Japan

博士後期課程 独文学専攻 2017年度入学

松 澤 智 子

MATSUZAWA Tomoko

【論文要旨】

ドイツの戯曲作家であるカール・ツックマイヤーは、戯曲の他に脚本や小説、抒情詩など多方面で活動した。1950年代を中心に戯曲や小説が日本語に翻訳され、戯曲は2作品が上演、さらに脚本を担当した映画が上映されるなど、ツックマイヤーの作品は日本でも受容されている。ツックマイヤーが作家としての地位を確立し始めた時期、ドイツではラジオ放送が発展していく。自身の作品をあらゆる世代に知ってもらうためにツックマイヤーはラジオ向けに脚本を書き直すなど、新しいメディアであるラジオを活用した。またテレビが普及した時も同様であった。演劇、映画、ラジオ、そしてテレビといったメディアと共に活動していたことで、ツックマイヤーは作家として存在することができたのではないだろうか。日本で受容された作品とその時期の背景を基に、日本の大衆文化とツックマイヤー作品がどの様に関係していたのか、そしてツックマイヤーとメディアの繋がりから彼の作品の多様性を考察することが、本稿の試みである。

【キーワード】 ツックマイヤー、ドイツ文学受容、西洋文化受容、メディア、大衆

はじめに

ドイツ演劇界を牽引してきた戯曲作家の一人であるカール・ツックマイヤー（Carl Zuckmayer, 1896-1977）は、戯曲の他に叙情詩、小説、脚本、自叙伝など多方面で活動した。戯曲『楽しきブドウ山（*Der fröhliche Weinberg*）』（1925）でクライスト賞を、1929年にはゲオルク・ビュヒナー賞を受賞したことで文学的地位を確立していく。ツックマイヤーの作品には「生」と向かい合っ

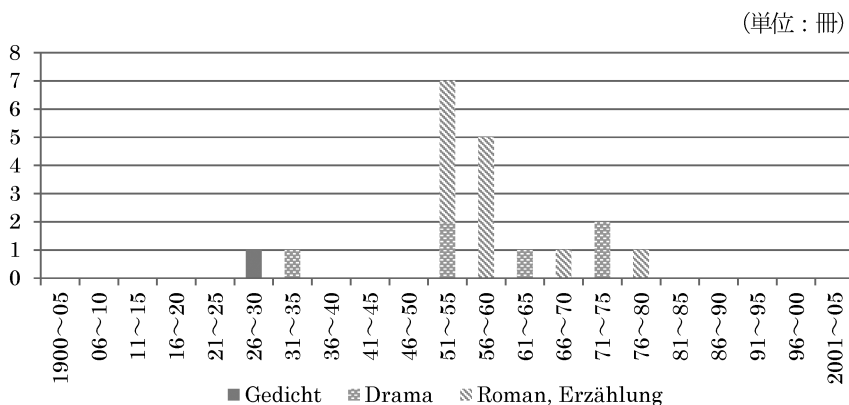
生きている人々の素朴さが、明るくそしてユーモアたっぷりに描かれており、この「土着的庶民性」¹が人々に親しまれたことで、大衆的な作家として人気を高めていくのであった。

ツックマイヤーは、日本の演劇と映画に無縁ではなかったにもかかわらず、日本にはツックマイヤー作品の受容をまとめた資料がない。ドイツでは今なお研究が続けられているが、日本においてはほとんど知られておらず、それどころか日本のドイツ文学者によって書かれた研究論文ですらほとんどない状況である。そこで本稿では、日本で受容されたツックマイヤーの作品をまとめ、その当時の文化的背景を基にツックマイヤーのメディアに対する意識の高さを追究していきたい。日本語に翻訳された作品や上演あるいは上映された個々の作品を分析することが目的ではなく、日本の大衆文化とツックマイヤーの作品がどの様に関係していたのか、そしてツックマイヤーとメディアの繋がりを確認することによって見えてくるツックマイヤー作品の多様性を考察することが本稿の試みである。

まず、日本におけるツックマイヤー作品の翻訳の状況を見てみよう。1926年に叙情詩が一篇翻訳されたのをはじめ、戯曲や小説など13作品19件が翻訳されている（別紙資料1参照）。これらの翻訳数を年代ごとにグラフ化してみると、1950年代にツックマイヤーの作品が多く翻訳されたことがよくわかる（表1）。

次に「ドイツ語文学翻訳書の出版点数の推移」²（表2）を見てみると、ドイツ語文学翻訳書の件数は1930年代後半から著しく増加し、第二次世界大戦後の10年間（1946年～1955年）に最も多くの翻訳書が出版されていることがわかる。ツックマイヤーが例外的に多く翻訳された1950年代は、このグラフのピーク時とほぼ重なっている。この時期に日本ではドイツ文学受容が増え、その

〈表1 ツックマイヤー作品翻訳書の出版点数推移〉

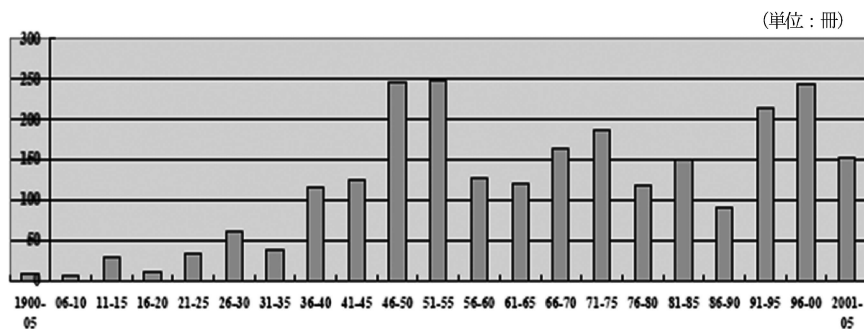


¹ 藤本淳雄ほか著『ドイツ文学史 第2版』（東京大学出版会、1995）、248頁 参照。

² 藤井明彦「ドイツ文学翻訳概観」（2007）、日本独文学会、

URL: <http://www.jgg.jp/modules/d3downloads/index.php?page=singlefile&cid=1&lid=12>（2017年9月7日 参照）

〈表2 ドイツ語文学翻訳書の出版点数の推移〉



関心の高まりの中でツックマイヤーの作品も翻訳されたと推測できる。1966年～1975年は、1961年に始まるベルリンの壁の構築や学生運動に見られる国家体制への抵抗など、ドイツでの社会的な変化が日本でも注目を集めたことで翻訳数が増えたと思われる。1960年代以降は、ツックマイヤーの翻訳本は少なくなっていくが、少ないながらもこの時期に引き続き翻訳されていることは重要であると言えよう。1990年代に再びドイツ文学翻訳書が増えてくるのは、1989年11月に東西を分断していた壁が崩壊し、翌年10月に再統一されたことが理由であると考えられる。壁の崩壊と再統一はツックマイヤーと関係がないので、この時期にツックマイヤーの作品が翻訳されていないことは当然のことであろう。

以下、日本の大衆文化にツックマイヤーの作品がどのように受容されていったのかを、演劇と映画を中心に見ていくことにする。

第一章 日本で上演されたツックマイヤーの戯曲

1. 「劇団東京」が『楽しき葡萄畑』を上演

日本の新劇史を語る上で最も重要な人物の一人である青山杉作（1889-1956）が主宰した「劇団東京」が、その旗揚げ公演としてツックマイヤーの戯曲『楽しきブドウ山』を選んだ。これが日本で初めて上演されたツックマイヤーの戯曲作品である³。『楽しき葡萄畑』と題された三幕の戯曲は、青山演出、北村喜八（1898-1960）訳で1932年11月30日から12月3日の4日間に全5回、帝国ホテル演芸場で上演された⁴。

³ 都新聞「劇評 楽しき葡萄畑」（1932年12月4日、朝刊）中日新聞社監修『都新聞』[復刻版]（柏書房、1994）

⁴ 読売新聞「汐見等が新劇團結成 月末に旗擧」（1932年11月17日、東京・夕刊）「読売新聞データベース ヨミダス歴史館」, URL: <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>（参照日：2017年9月15日）

1923年9月1日の関東大震災によって、帝劇、有楽町座、明治座、神田劇場、壽座など東京の劇場のほとんどが倒壊、焼失した。そうした事情もあって、大震災の被害を免れた帝国ホテル演芸場は、日本の現代演劇史の中でも重要な舞台の一つとなる。帝国ホテル編『帝国ホテル百年史』（帝国ホテル、1990）、277頁 参照。

ここで日本の新劇史を見ておこう。1905年にロシアとの戦争に勝利したことで、日本の経済は発達していく。自由な雰囲気の中で外国と日本の伝統文化が混ざり合い、都市の文化が熟成していった。この頃ドイツから帰国した者たちが紹介するヨーロッパの新しい芸術が、日本の文学界や演劇界に刺激を与えることになる⁵。日本における新劇の歴史の始まりは、小山内薫（1881-1928）と二世市川左団次（1880-1940）が「自由劇場」を旗揚げした1909年である⁶。その後、1917年に青山と関口存男（1894-1958）が踏路社を立ち上げ⁷、1924年6月に日本の新劇のジャンルを確立した劇団「築地小劇場」が、小山内、青山、土方与志（1898-1959）を中心に活動を始めるのであった⁸。ヨーロッパ近代劇の影響を受けて発達した築地小劇場は、海外の戯曲も積極的に上演することで日本の演劇の水準を上げていく。他の若い演出家たちも、マックス・ラインハルト（Max Reinhardt, 1873-1943）を模範として新しい演劇の道を切り開こうと、翻訳劇の上演を試みるようになる。特に多く上演されたドイツの戯曲は人気となり、翻訳劇が増えてくのであった⁹。1928年12月に小山内が亡くなると築地小劇場は分裂を始め、土方を中心とした「新築地劇団」が創立され、青山が主事となった築地小劇場は本郷座に本拠を移した。しかし青山も築地小劇場を退き、1930年6月に「劇団新東京」を立ち上げた¹⁰。そして翌1931年3月、劇団新東京は改組されて「劇団東京」となり、その旗揚げ公演で『楽しき葡萄畑』が上演されたのであった。

なぜ青山がこの作品を選んだのかがわかる資料は残っていないが、『楽しきブドウ山』が1925年12月22日にシッフバウアーダム劇場（Theater am Schiffbauerdamm）で初めて上演されると、嵐の様な喝采で迎えられて2年半のロングランを記録した大ヒット作品であったことが、理由の一つとして挙げることができるだろう¹¹。この作品が発表された1925年は、表現主義の芸術運動に終止符を打った新即物主義運動が新しい芸術傾向として浸透し始めた頃で、登場人物が語る言葉に地方色が強い響きの日常会話を取り入れることや、性欲に対する大胆な描写を組み込んだ戯曲は『楽しきブドウ山』の他にはなく、人間的な生活や自然そのものに戻ろうと訴えかけるツックマイヤーの作品は、開放的で素朴な人間模様を描いた新しい民衆劇としてドイツで注目を集めた。そして、大衆から高い人気を得たツックマイヤーは、ドイツの文壇で地位を確立したのであった。築地小劇場が『楽しきブドウ山』の初演の前年に旗揚げされていることから、青山が1925年当時からこの戯

⁵ 神品芳夫ほか編『日本におけるドイツ語文化回顧展：IVG 東京大会記念展覧会』（郁文堂、1990）、47頁 参照。

⁶ 森西真弓「阪東寿三郎と第一劇場」藝能史研究会『藝能史研究』（113）、119、50-64頁 参照。

⁷ 関口存男「踏路社時代」青山杉作追悼記念刊行会編『青山杉作』（青山杉作追悼記念刊行会、1957）、115-116頁 参照。

⁸ 神品（郁文堂、1990）、83頁 参照。

劇団と同じ名称の劇場が建設されると、空襲で焼失するまで新劇の中心として存在するのであった。

⁹ 神品（郁文堂、1990）、48頁 参照。

¹⁰ 青山杉作追悼記念刊行会（青山杉作追悼記念刊行会、1957）、61-67頁 参照。

¹¹ 神品芳夫「ツックマイヤーの回想録」文芸春秋社『文学界』21（11）、1967、138-140頁 参照。

曲に注目していたことが推測できる。ドイツでのヒットとツックマイヤーのその後の活躍に着目していた青山が、旗揚げ公演にこの戯曲を選んだとしても不思議ではない。

2. 俳優座が『ヒゲの生えた制服』を上演

1944年2月に千田是也（1904-1994）が結成した「俳優座」は、第70回公演にツックマイヤーの戯曲『ケーペニックの大尉（*Der Hauptmann von Köpenick*）』（1931）を『ヒゲの生えた制服』と題して上演した¹²。この作品は、文書偽造の罪で服役していた主人公の元靴職人ヴィルヘルム・フォークトが、出所して仕事探しを始めることをきっかけに展開していく。仕事に就くには滞在許可証が必要であり、滞在許可証やパスポートを手に入れるには仕事に就いている必要がある。フォークトが状況を説明しても「規則だから」の一点張りで、役人は書類を発行してくれない。パスポートを偽造しようとフォークトが役所に忍び込んだところを現行犯で逮捕され、刑務所に送られる。10年後出所したフォークトは、古着屋で手に入れた将校の軍服を着て、一隊の兵士と共にケーペニック市役所を襲い、パスポートを発行するように迫るのであった¹³。千田は1927年5月から4年半の間、演劇の勉強をするためにベルリンに留学しており¹⁴、ベルリンで初演を迎えた1931年3月におそらくこの作品を観ていたであろう。そして、ツックマイヤーの人気を直接感じていたのではなかろうか。

1931年当時、ドイツの演劇界において軍服の全能を風刺したこの作品は、国家体制について一石を投じること成功した政治演劇の一つであった。さらにこの作品には、官僚的な形式主義への鋭い風刺だけでなく、一人の人間が人間として生きていくことができない社会への痛烈な批判と、人間の存在を脅かすことへの怒りが込められている。この作品が日本で上演された1966年の日本は、1960年に日米安保条約が結ばれたことをきっかけに学生運動や労働者による反体制運動が激しくなった時期である。『ケーペニックの大尉』と原題をそのまま訳すのではなく『ヒゲの生えた制服』というタイトルにすることで、プロイセン王のヴィルヘルム二世を象徴するヒゲを介して、ドイツの軍国主義的国家体制だけでなく日本の国家体制も連想させようとしたのではなかろうか。

ところで、俳優座が『ヒゲの生えた制服』を上演したのは、もう一つ別の理由があったようだ。

¹² 小沢栄太郎演出、加藤衛訳、高田一郎装置、秋本道男照明、中村八大音楽。1966年4月9日から27日（19回）は都市センターホール（東京）、4月28日～6月2日（26回）は横浜、北陸、京都、大阪、神戸、名古屋などの地方公演。劇団俳優座『俳優座史 第5巻1974～1983』（俳優座、1986）、176頁 参照。

俳優座は三幕十六場で上演（『劇団俳優座第七十回上演台本』参照）、原作は三幕二十一場の戯曲。Carl Zuckmayer, *Der Hauptmann von Köpenick*, Frankfurt am Main und Hamburg: Fischer Bücherei, 1965.

俳優座の設立には青山も参加している。千田是也『私の演劇手帖』（筑摩書房、1959）、146頁 参照。

千田は、築地小劇場の研究生として旗揚げ公演に参加していた。神品（郁文堂、1990）、86頁 参照。

¹³ カール・ツックマイヤー著、杉山誠訳『ケーペニックの大尉』『筑摩世界文学大系90』所収（筑摩書房、1965）、173-227頁

¹⁴ 千田（筑摩書房、1959）、289頁 参照。

1965年11月の上演が不振に終わった俳優座は劇団運営について検証し、観客動員の強化のために1966年の春から新体制を打ち出した。その一環として、俳優自らが切符を売ることになった。演出の小沢栄太郎（1909-1988）や主役の東野英治郎（1907-1994）たちは、稽古の合間をみても官庁や会社などを回っている¹⁵。このような努力を背景にして第70回公演は上演され、4月の東京公演を皮切りに、京都、大阪などの都市を巡回した舞台は、観客から好評を得ることができた。ここで注目すべき点は「大衆性」であろう。主役を演じた東野英治郎はこの劇団を代表する役者の一人で、人気も知名度も高い役者だ。音楽を担当した中村八大は、歌謡曲全盛の日本でヒット曲を発表し続けた作曲家である。俳優座の様な大きな劇団が独立独歩の経営をしていくためには、集客を見込める作品、つまり大衆が見たいと思う作品を上演しなくてはならない。そもそもこの戯曲は、1906年10月16日にドイツの靴職人であったフリードリヒ・ヴィルヘルム・フォークト（Friedrich Wilhelm Voigt, 1849-1922）が古着屋で購入した陸軍大尉の制服を着用し、本物の陸軍部隊を率いてのベルリン郊外のケーペニック市庁舎を襲撃して市長らを逮捕した上に、公金4,000マルクを盗み逃走したという実話が基になっている¹⁶。多くのドイツ人がこの出来事に関心を寄せていることに目を付けたツックマイヤーが、大衆を意識して書き上げた戯曲である。この上演は大人気となり、ケーペニックの大尉人形が売られるほどドイツの民衆に親しまれる作品になったのである¹⁷。実際に起きた詐欺事件を民衆が知っているという前提で上演されるドイツとは違い、俳優座は事件を知らない日本人を前にして上演しなくてはならなかったため、ドイツとは違う演出をする必要があった。しかし、善良な市民が生きていくために体制に立ち向かわなくてはならない状況や服装によって人間の価値を判断することの滑稽さは、いつの時代であっても、またこの国でも共通することではなからうか。『ヒゲの生えた制服』は1960年代の日本の社会的な変化の中において、大衆が要請した時宜を得た上演であったと言えるのではないだろうか。

『ケーペニックの大尉』は1931年にベルリンで初演を迎え、同じ年に映画化（同タイトル）されているのであるが、その前年の1930年にドイツで封切られた映画『嘆きの天使（*Der blaue Engel*）』の製作にツックマイヤーが関わっている。そのことから、おそらく『ケーペニックの大尉』の映画化を念頭に置いて戯曲を執筆していたと推測することができる。ツックマイヤーの本領、つまり大衆が好む作品を書き、作品を広めるためにメディアを最大限に活用しようとする意欲も感じられるのではなからうか。貪欲なまでにツックマイヤーが大衆とメディアを意識して活動できたのは、1920年12月に初めてベルリンに来たことが影響していると思われる。この頃のベルリンは、パリやロンドンに代わる現代文化の発信地であった。既成の価値観を破壊しようとするダダイズムと、政治的左翼と結びついて文化革新を唱えて大衆への働きかけを重視したアヴァンギャルドが、新し

¹⁵ 朝日新聞「俳優も切符を売り歩く 俳優座の“新体制”公演」（1966年3月22日、東京・夕刊）『朝日新聞』〔縮刷版〕

¹⁶ 種村季弘『べてん師列伝：あるいは制服の研究』（岩波書店、2003）、3-78頁 参照。

¹⁷ テアトロ「今月の新劇」 テアトロ社『テアトロ』（271）、1966、107頁 参照。

い文化運動として注目されていた¹⁸。これらの華やいた大衆文化は、伝統的な価値に打撃を与えるものでもあったために社会的な反発や批判もあったが、ツックマイヤーにとっては大きな刺激であった。どんな仕事をしてでもベルリンに留まっていたかったツックマイヤーは、人気のカバレットにバラード調のシャンソンを書き、雑誌に詩や短い散文を投稿するなど単発的な仕事で生活を繋げていた。その様な仕事の一つに UFA (Universum Film Aktiengesellschaft) で製作される映画のエキストラ出演があった¹⁹。たとえエキストラであったとしても黄金期の映画製作に参加できたことは、貴重な経験になったのではないだろうか。

第二章 日本の映画最盛期におけるツックマイヤー

1. 映画『嘆きの天使』の脚本家ツックマイヤー

1920年代、映画は無声からトーキーに移行する過渡期であり、新しい作品に対する民衆の関心は増々高まっていくのであった。この時期の映画界で注目すべき点は、技術上の克服と表現上の工夫がされたこと以上に、何よりも脚本家が誕生したことであろう。そしてツックマイヤーの脚本家として活動を始めるのもこの時期であった。ハインリヒ・マン (Heinrich Mann, 1871-1950) の小説『ウンラート教授 (*Professor Unrat*)』(1905) の映画化の話が最初にもちあがったのは、サイレント映画時代の1923年であった。しかし、この小説をサイレントで製作することは困難であったため、一旦映画化の話はたち消えとなる²⁰。1927年にアメリカで発表されたトーキー映画『ジャズ・シンガー』の成功を受け、UFA も1929年にトーキー映画へ切り替える計画を打ち立てた²¹。何としても成功を取めたいUFAは、当時ハリウッドで活躍していたエーミール・ヤニングス (Emil Jannings, 1884-1950) に白羽の矢を立て、ヤニングスが呼び寄せたジョセフ・フォン・スタンバーグ (Josef von Sternberg, 1894-1969) 監督の下で『嘆きの天使』が製作されることになった²²。最初にプロデューサー、監督、脚本家そして原作者たちが一堂に会して映画の大まかな内容について相談し、そこで決められたことを基にツックマイヤーらが映画のための短編小説と言ったものを書きあげ、その後ローベルト・リープマン (Robert Liebmann, 1890-1942) によって脚本が完成された²³。

¹⁸ 木村靖二編『ドイツ史』(山川出版社, 2004), 294-302頁 参照。

¹⁹ Vgl. Hans Wagener, *Carl Zuckmayer*, München: C. H. Beck, 1983, S. 24-26.

²⁰ Vgl. Raoul Ploquin, *Entretien avec Heinrich Mann*, in: (Nachgedruckt) *La Revue du Cinema*, 2^e Année N° 17, 1. 12. 1930, Paris: Pierre Lherminier Editeur, p.71.

小説を読んでハインリヒ・マンに映画化を最初に提案したのは、主人公ラートを演じたヤニングスであった。

²¹ 佐藤忠男「トーキー時代」『講座日本映画3 トーキーの時代』(岩波書店, 1986), 2-36頁 参照。1927年、貿易業者だった皆川芳造はフィルム式トーキーの技術権利を購入して、新劇俳優たちの出演による30分足らずの短編『黎明』を小山内薫に製作させた。

²² Vgl. Werner Sudendorf, *Produktionsgeschichte*, in: Werner Sudendorf (Hrsg.), *Marlene Dietrich. Dokumente, Essays, Filme*, Frankfurt a. M./Berlin/Wien: Ullstein, 1980, S. 65-77, hier: S. 67.

文芸作品を映画化する場合には、原作の筋立てや人物をそのまま登場させることが必ずしも作品の成功につながるわけではない。特にこの作品の場合は、原作の出版年から映画上映までに25年経っているため、原作の意図するテーマを活かしながら小説の持ち味を現代人の感覚に合わせなくてはならないだろう。そこでツックマイヤーは、小説を大胆に脚色した。小説が書かれた当時の権威主義的な要素である学校への批判や社会に対する葛藤のテーマが省かれ、映画では真面目な市民が人生の抛り所を無くし転落していく運命、人間的で悲劇的な運命にテーマを絞ることで、時代遅れの小説を現代風に仕上げることができた²⁴。「男の痛ましさと哀しさ、女的美しさと残酷さ」²⁵を見事に描き出し、謹厳な男性が転落する人生を浮かび上がらせる脚本を完成させた。さらにこの脚本は、マレーネ・ディートリヒ (Marlene Dietrich, 1901–1992) の粋な振る舞いと惜しげもなく露わにされた脚線美だけではなく、彼女の物憂い歌声の素晴らしさをも引き出すことに成功したのであった。そしてこのことが、日本での人気にも繋がったのである。

日本でドイツ映画が本格的に上映されるようになるのは、第一次世界大戦後に黄金時代を迎えたドイツ映画の輸入契約を結んだことによる²⁶。『カリガリ博士 (Das Kabinett des Dr. Caligari)』(1920)をはじめとする表現主義の映画は、ベルリンで封切された翌年に日本で公開されるという早さで、ドイツ映画は日本人の広い層に受け入れられていった。そして1930年にベルリンで上映されると、翌年5月に日本で封切された『嘆きの天使』²⁷や『会議は踊る (Der Kongreß tanzt)』(1931)などの名画によってドイツ映画は日本の映画ファンの心を捉えたのであった²⁸。アメリカから輸入される映画は、ほとんどがトーキーになっていく。新たに「音」という表現方法を獲得した映画は発展段階を迎え、1931年2月11日に封切られた『モロッコ (Morocco)』(1930)では日本初の字幕が採用された²⁹。この映画の監督であるスタンバーグと主演のディートリヒは日本でも人気となり、映画ファンが『嘆きの天使』の上映を待ち望む中、5月13日に電気館 (浅草)、武蔵野館 (新宿)、邦楽座 (有楽町) の三館で封切られることになった³⁰。

²³ Vgl. Carl Zuckmayer, *Der Angriff auf Heinrich Mann*, in: *Berliner Zeitung* v. 31. 3. 1930. In: Sudendorf (Hrsg.), *Marlene Dietrich*; a. a. O., S.115–116, hier: S. 115.

プロデューサーはエーリヒ・ポマー (Erich Pommer, 1889–1966)、ツックマイヤーとカール・フォルメラ (Karl Vollmoeller, 1878–1948) が脚色を担当。

²⁴ Vgl. Ebd..

²⁵ 淀川長治著、岡田喜一郎編『淀川長治映画ベスト1000』(河出書房新社, 2009), 231頁 参照。

²⁶ 神品 (郁文堂, 1990), 48頁 参照。

²⁷ 東京朝日新聞「待望された「嘆きの天使」スタンバーグ禮賛に」(1931年5月13日, 東京・夕刊)『東京朝日新聞』[縮刷版]

世界市場をねらったこの作品は英語版が同時製作され、日本では英語版を公開。「嘆きの天使」、日本大百科全書, JapanKnowledge, URL: <http://japanknowledge.com> (参照日: 2017年9月15日)

²⁸ 神品 (郁文堂, 1990), 98頁 参照。

²⁹ 山田和夫監修『映画の歴史』(合同出版, 1977), 8–9頁 参照。

³⁰ 製作は『嘆きの天使』が先だが、日本での上映は『モロッコ』が先であった。『モロッコ』の封切も電気館、武蔵野館、邦楽座の三館である。広告 (1931年2月8日, 東京・夕刊)『東京朝日新聞』[縮刷版]

ここに当時の日本の様子がわかる興味深い新聞広告がある（右図参照）³¹。宣伝文句には、「到頭出た！東京中のどの隅からもこの歓聲が聞える。初夏の話題はロラの全身に盡きる」³²と書かれている。1931年の上映当時、日本では西洋人と接することはほとんどなく、アメリカ人が日常的に歩いているのを見るのは1945年の秋以降である。それまでの日本で触れられる西洋文化といえは、蒸気船や大砲などの製品や外国語を学ぶことであった。映画を通じて西洋人やその文化を知る機会が大半であったこの時期の広告に「全身」という言葉があることによって、西洋人の容姿そのものを見たいという当時の日本人の好奇心が伺える。



〈広告：映画『嘆きの天使』
『東京朝日新聞』1931年5月13日（東京・朝刊）掲載

さらに興味深いことは、この映画が大阪の劇団によって劇化されていたことである。歌舞伎革新運動に最初の狼煙を挙げた三世阪東壽三郎（1886-1954）は、1929年8月1日に大阪で劇団「第一劇場」を創設した³³。創作劇が主流であったとはいえ、優れた戯曲を作り出すことができず、この劇団は翌年9月の公演を最後に解散となった。しかし周囲の期待が大きかっただけに、第一劇場に代わる新劇団を望む声は少なくなかった。そこで劇作家、演出家たちを新たにして1931年3月に第一劇場は活動を再開した。その第一回公演で『嘆きの天使』を上演したのであった³⁴。不十分ながらも映画を立体化して観客に退屈させない演出や、主人公ラート役の壽三郎の重厚さや男優の西洋人を演じる出来栄が称えられた一方で³⁵、ヒロイン役の河村菊江に対しては、ディートリヒの妖艶さと脚線美を見ている者には物足りない³⁶、「肉感」が絶無³⁷、女としての「肉香」がない³⁸などの酷評を受けた。この様な劇評からも、当時の日本人が持つ西洋人の容姿への驚きの強さ

³¹ 広告（1931年5月13日，東京・朝刊）『東京朝日新聞』〔縮刷版〕

³² 同上

³³ 東京朝日新聞「壽三郎，大阪で新劇の旗揚げ 浪花座で猿之助に對抗」（1931年1月28日，東京・夕刊）『東京朝日新聞』〔縮刷版〕 この活動再開の裏には、猿之助の関西進出を防止する松竹側の防衛意図もあった。

³⁴ 森西（1991）

³⁵ 高原生「劇評『嘆きの天使』（1931年3月14日，大阪・朝刊）『大阪毎日新聞』毎日新聞社データベース「毎索」，URL: https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/IPCU/WMAI_ipcu_menu.html#（参照日：2017年9月15日）

³⁶ 花光生「更新第一劇場「歎きの天使」に於る壽三郎」（1931年3月6日，大阪・朝刊）『大阪朝日新聞』朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」，URL: <http://database.asahi.com/library2/smendb/d-image-frameset-main.php>（参照日：2017年9月15日）

³⁷ 石割松太郎「変わった東西の二劇団（中）」（1931年3月20日）『大阪時事新報』〔マイクロ資料〕

³⁸ 同上。

〈表3 『嘆きの天使』の舞台化〉

初演日	劇団名等	劇場	演出	脚色	俳優
1931年3月1日 ～3月20日	第一劇場	浪花座 (大阪道頓堀)	野淵昶	森田義信	阪東壽三郎 河村菊江
1931年4月10日 ～????	—	木村座 (猿若町：現浅草)	???	宮内壽松 (翻案)	加藤精一 原阿佐緒
1935年2月1日 ～2月26日	男女優合同二月興行	歌舞伎座 (木挽町：現銀座)	野淵昶	森田義信	阪東壽三郎 水谷八重子
2001年10月19日 ～11月6日	劇団昴	三百人劇場 (本駒込)	菊池准	菊池准	内田稔 湯屋敦子

がわかるのではなかろうか。脚本も出演者も吟味して万全を期して再スタートを切ったにもかかわらず、新しい大衆劇の樹立を目標に全力を注いだ再興第一劇場は、ディートリヒに劣らぬ女優を立てられなかったことが解散に繋がる原因であったかの様に、この公演限りでまたもや解散してしまうのであった。以降も、『嘆きの天使』は幾度か他の劇団で上演されている(表3)³⁹。

第二次世界大戦が終わると、日本では映画が娯楽の王様となっていく。1955年にドイツではツックマイヤーの小説『生と死の支配者 (*Herr über Leben und Tod*)』(1938)が映画化され、1957年に日本で公開されるのであった⁴⁰。

2. 映画『青い潮』の原作者ツックマイヤー

戦後の焼け残った映画館は、復興した日常生活を思い描き、海外の文化や音楽のリズムそのものに解放感を得たい大衆で溢れていた⁴¹。1945年の映画館数は845館であったが、翌1946年は1376館に増え、入場者数は7億3000万人を記録している。占領当初はアメリカ軍が、厳しい検閲と企画に対する指導を行い、民主主義啓蒙のための映画が盛んに作られた時期でもあった。しかし1951年に対日講和条約が締結され(発効は1年後)日本が独立すると、日本の映画界はそれまで禁止されていた広島と長崎の記録フィルムをニュース映画の一部として公開、次いで敗戦前後に撮影された時代劇を上映、そして1956年の大ヒット映画『太陽の季節』へと繋がっていく⁴²。

³⁹ 早稲田大学演劇博物館「演劇上演記録データベース」, URL: <http://www.enpaku.waseda.ac.jp> (参照日: 2017年9月15日)

森西(1991)

小野勝美『原阿佐緒の生涯』(古川書房, 1974), 271頁 参照。

金子子和子編『歌舞伎座百年史 資料篇』(松竹, 1993), 240頁 参照。

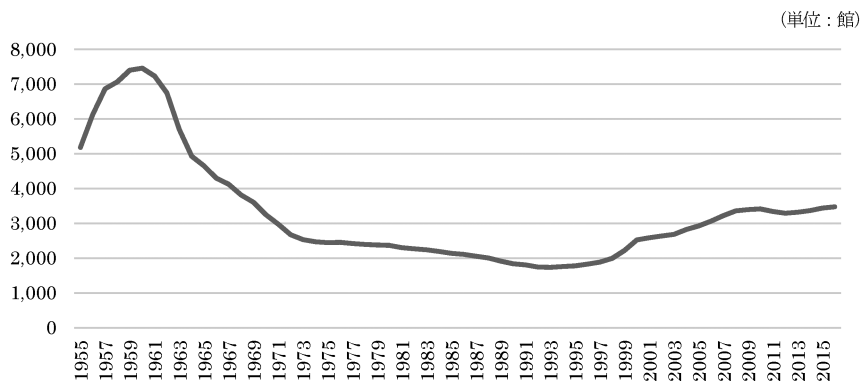
東京朝日新聞「激しい純愛と悲哀を 劇団昴「嘆きの天使」」(2001年10月19日, 東京・夕刊)『東京朝日新聞』[縮刷版]

⁴⁰ 中村耕平『独和对訳シナリオシリーズ第5輯 青い潮』(南江堂, 1957), 2頁 参照。

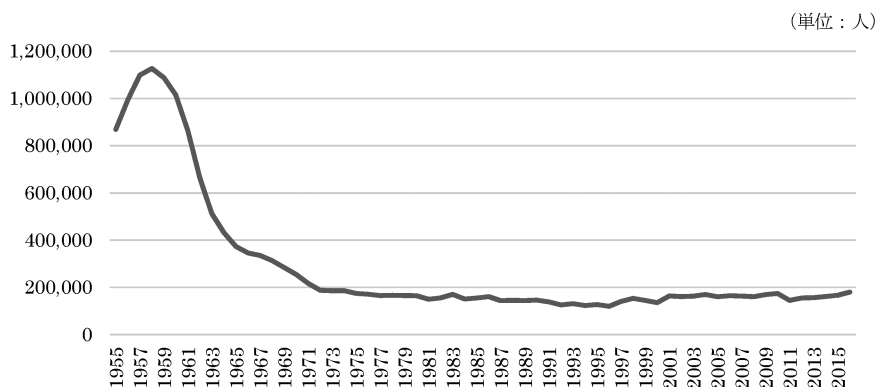
⁴¹ 鶴見俊輔「まえがき」『講座日本映画5 戦後映画の展開』(岩波書店, 1987), iii-iv 参照。

⁴² 佐藤忠男「ヒューマンズムの時代」『講座日本映画5 戦後映画の展開』(岩波書店, 1987), 2-71頁 参照。

〈表4 日本の映画館数の推移〉



〈表5 日本の映画館数の入館者数の推移〉



第二次世界大戦後、一流大学の学生がこぞって映画会社の入社試験を受けるほどの人気⁴³、1960年の映画館数7457館は史上最高の記録となった(表4参照)⁴⁴。映画『生と死の支配者』は、映画最盛期の1957年に『青い潮』というタイトルで上映された。同年に原作小説の日本語翻訳と映画シナリオ訳、合わせて3点出版されている点からも(別紙資料1参照)この映画への期待の高さが想像できるのではないだろうか。

しかし入館者数は、1958年の約11億人をピークに急速に減少していく(表5参照)。映画館数の推移も同様のカーブを描いているが、この急激な減少の原因はテレビの普及である。テレビの普及は映画界に大打撃を与え、1960年にカラー放送が本格的に始まると、大衆は映画館で映画を鑑賞

⁴³ 毎日新聞データベース「毎索」, 20世紀2001大事件(1960年代)「日本の映画館数, 史上最高に」,

URL: https://dbs.g-search.or.jp/WMNP/2001daijiken/maisaku_top.html (参照日: 2017年9月15日)

⁴⁴ 一般社団法人日本映画製作者連盟サイト内「日本映画産業統計 過去データ一覧表」で公開している統計を基に筆者がグラフを作成した。表5も同様。URL: <http://www.eiren.org/toukei/data.html> (参照日: 2017年9月15日)

1999年までは映画館数で統計を取っていたが、複合型映画館が増えたことにより、2000年以降はスクリーン数の統計を取っている。

することから自宅でのテレビ視聴するようになった。もし1960年以降に『生と死の支配者』が製作されていたならば、テレビが普及し始めた日本で『青い潮』は上映されていなかったかもしれない。映画化されたツックマイヤーの数ある作品の中から、日本で上映された作品は唯一『青い潮』だけであり、しかも映画全盛期の日本で公開されたということは非常に興味深いことである。もう少し詳しく、この作品について述べよう。

ツックマイヤーは、小説『生と死の支配者』を映画の底本としてイギリス映画界の鬼才アレクサンダー・コルダ (Alexander Korda, 1893-1956) に依頼されて1938年に書いた⁴⁵。この小説は、優秀な医師スタインホープ卿と結婚したリュシールが、義理の母と三人で暮らしている。息子を取られたと思っている母は、嫁に対して他人行儀に接する。その様な状況の中、不治の病を持つ子どもの誕生をきっかけに夫婦仲が冷めてしまう。リュシールは子どもを連れてブルターニュに行くのであるが、そこで情熱的な若い医師レーモンと恋に落ちる。夫の元に帰ろうとするリュシールを引きとめられないと知ったレーモンは謎の水死をとげる、という内容である⁴⁶。

1933年以降、ツックマイヤーの全戯曲はナチスによってドイツ国内で上演することを禁止され、さらに作品の国内出版も禁止されていた⁴⁷。ドイツ国内で活動ができなくなったツックマイヤーは、スイスのジェノア湖畔に滞在してこの小説を執筆した⁴⁸。このような政治的事情から、ツックマイヤーはこの小説がすぐには映画化されない懸念を抱いていたかもしれない。そのことは表6

〈表6 原作と映画の違い〉

原 作	映 画
ノーバート・スタインホープ卿 ロンドン大学教授、心臓外科の権威。ロンドンで母親と同居。	ゲオルク・ベルトラム教授 ベルリン大学教授、外科医。戦争中に妻子を失い、母親と共にベルリンに住む。
リュシール・ダタラン ダタラン侯爵令嬢。スタインホープの妻。	バルバラ・ハウゼン ウェエウナー・ハウゼンの娘。ベルトラムの妻。
ダタラン侯爵 プロヴァンスの侯爵。友人との決闘で負傷。ノーバートの手術により命が救われる。	ウェエウナー・ハウゼン 楽団指揮者。車の運転中に踏切の遮断機に気付かず事故を招く。偶然この列車に乗っていたゲオルクにより生命が救われた。
レーモン・デュケノア フランス人の青年医師。フランス西海岸の漁村で開業。リュシールとアメリカに行こうとするが、出航前夜に列車事故で死亡。	デニアル・カレンティス 第二次世界大戦中バルト海地方からフランスに亡命した医師。バルバラと恋に落ちるが、海水浴中に波にさらわれて死亡。

⁴⁵ カール・ツックマイヤー原作、フレデリック・グレンデル、ヴィクトル・ヴィカス脚色、中村耕平訳註『青い潮』(南江堂, 1957), 2頁 参照。

実際に映画化されたのは1955年であり、監督はヴィクトル・ヴィカス (Victor Vicas, 1918-1985) であった。

⁴⁶ 桜井正寅『青い潮：生と死を支配するもの』(南江堂, 1957)

⁴⁷ Vgl. Jang-Weon Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2004, S. 52.

⁴⁸ 吉田六郎『生死を越えて』(角川書店, 1957), 「解説」194頁 参照。

に示す様に、原作と映画の登場人物の相違が『嘆きの天使』のような大掛かりな変更を必要としない構成で書かれていたことから推測できる。

第三章 メディアとツックマイヤー

ツックマイヤーの戯曲執筆に関して特筆すべき点は、未完の作品が無いということであろう。完成した戯曲作品は全て上演しているという事実から、ツックマイヤーが上演の機会を見越して戯曲を書いていた作家であったことが予想できる（別紙資料2参照）。黄金の20年代、華やいたベルリンの芸術文化の中で活動してきたツックマイヤーは、上演と出版が約束されたうえで作品を書くことが当たり前になってしまったのかもしれない。1939年6月にツックマイヤーはアメリカに亡命するのであるが、その時期に作品を発表していないのは、上演あるいは出版の機会がないためにあえて執筆しなかったとも考えられるのではなかろうか。

またドイツにおけるラジオの発展も、ツックマイヤーの活動に大変重要なことであった。1920年代のメディア発展期にツックマイヤーは、戯曲や映画だけではなくラジオにも積極的に取り組んでおり、それは作家としてのキャリアを向上させることを助けた。1923年10月にフンク・シュトゥンデ・ベルリン（Die Funk-Stunde Berlin）が開局するとラジオは飛躍的に発達し、1926年8月にドイチェ・ヴェレ（Deutsche Welle）が広範囲にわたる放送を始めると、1923年に125万人だったリスナーが3年後には400万人以上になる⁴⁹。ラジオ放送開始当時は、音楽や詩の朗読を流していたラジオであったが、次第にトーク番組やラジオドラマなどバラエティに富んだ番組を放送するようになる⁵⁰。1925年に『楽しきブドウ山』が話題になると、作品の一部が朗読された。1927年に戯曲『シンダーハネス（*Schinderhannes*）』が朗読された時に、地域性が強い方言が特徴である自身の作品はラジオ用に作品を書き直す必要があると、ツックマイヤーは劇場上演とラジオ番組の明らかな違いを認識した。その後、戯曲をラジオで放送する際には必ず書き直すようになった⁵¹。さらに1920年代末になると子ども向けラジオ番組も増えてきた。それに合わせるかのようにツックマイヤーは子ども向けの戯曲『カカドゥーカカダ！（*Kakadu-Kakada!*）』（1920）を発表し、舞台稽古も兼ねてこの作品をラジオで放送したのであった⁵²。1930年7月、新聞のインタビューにツックマイヤーは次のように答えている。

⁴⁹ Vgl. Horst O. Halefeldt, *Gebremste Expansion: Organisation und Entwicklung der regionalen Sendegesellschaften nach 1926*, in: Joachim-Felix Leonhard (Hrsg.), *Programmgeschichte des Hörfunks in der Weimarer Republik*, Band 1, München: Deutscher Taschenbuch, 1997, S. 280–329, hier: S. 282.

URL: <http://www.dra.de/rundfunkgeschichte/radiogesichte/organisation/pdf/programmgeschichte-auszug.pdf> (abgerufen am 17. August 2017)

⁵⁰ Vgl. Theresia Wittenbrink, *Carl Zuckmayer im Rundfunk der Weimarer Republik*, in: Gunther Nickel (Hrsg.), *Carl Zuckmayer und die Medien*. Zuckmayer-Jahrbuch Band4–1, Sankt Ingbert: Röhring Universitätverlag, 2001, S. 309–339, hier: S. 310.

⁵¹ Vgl. Ebd., hier: S. 320.

⁵² Vgl. Ebd..

ドイツのラジオは、私の思うところ、実に素晴らしい装置である。もしラジオが、私の心に抱いている望みを叶えてくれて、「ツックマイヤーの時間 (Zuckmayer-Stunde)」を毎日してくれたらもっと素晴らしいのだが。1週間の番組構成は次の様に考えている。月曜日は大人向けのツックマイヤーの時間、火曜日は未成年向け、水曜日は中高年、木曜日は少女、金曜日は青年、そして土曜日は子どものために。日曜日はお休みしてもいいかもしれない。というのも、もし毎日放送したら嫌気がさす人もいるかもしれないから⁵³。

ツックマイヤーは戯曲で成功することを心に決めていたため、ラジオドラマそのものを書くことはなかったが⁵⁴、劇場や映画館に足を運ばない不特定のドイツ人にラジオを通じて自分の名を広め、あらゆる年代から支持を得ようとした。つまり、大衆から人気を得るための一つのアイテムとしてラジオを活用したことが、インタビューからもよくわかるであろう。

最後にテレビ放映について見てみよう (別紙資料3参照)。ツックマイヤーが生涯にわたって映像メディアに関わっていたことがわかる。トーキー映画が始まったことで映画が人気娯楽になると脚本家として活躍し、テレビが普及するとそれに合わせて作品発表のメディアをテレビにシフトしていく。映画上映からテレビ放送に移行している様子をはっきりと確認できる。ツックマイヤーが大衆を意識し、新しいメディアに素早く対応する能力、そして作品をメディアに合わせて柔軟に書き換える能力に長けていたことが読み取れる。

おわりに —今後の論文執筆の展開—

1920年代のベルリンでツックマイヤーは、表現主義から新即物主義へ移行している芸術の潮流に乗り、無声からトーキーに移行する過渡期の映画界を体験し、ラジオの普及も積極的に活用した。黄金の20年代、その活気づいた刺激溢れる都会の中でツックマイヤーは感性を磨き、常に時代の最先端で活躍しようと旺盛に活動していた。それは、新しいメディアが大衆に対していかに影響力を持っているのかを知る時期であったにちがいない。劇場、映画、ラジオ、そしてテレビといったメディアの発展期に活動していたからこそ、「文豪カール・ツックマイヤー」が存在できたと言っても過言ではなからう。

本稿を通じて、ツックマイヤーに多様性をもたらしたものはまさしくメディアであったことが確認できたのではなからうか。メディアを活用することで大衆に向けて作品が発せられ、さらには日本でも受容されるようになったのである。その中でも映画『嘆きの天使』は、一番人気を博した作

⁵³ Vgl. Zuckmayer, Carl: *Beitrag zu der Umfanbe Was bedeutet uns der Rundfunk?*, in: *Hannoversches Tageblatt* vom 26. Juli 1930, in: Nickel (Hrsg.): *Carl Zuckmayer und die Medien*, a. a. O., hier: S. 309.

⁵⁴ Vgl. Carl Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1969, S. 383.

まだ才能が開花していない若い作家たちがラジオ劇を書くことは大切な仕事であると、ツックマイヤーは言っている。しかしツックマイヤー自身は戯曲を書くことを決めていたので、1920年代半ばまでの苦しい時期もラジオドラマを書かなかった。そのことが自分には良かったと語っている。

品と言えよう。しかしそれは、「カール・ツックマイヤー」という名前ではなく作品自体を日本に広めたのみで、彼の脚本家としての能力が確認できたに過ぎない。日本では、俳優以外に脚本家や音楽、衣装なども注目されるようになったのは最近である。おそらく『嘆きの天使』が封切られた当時、映画専門家や熱心な映画ファンは脚本家としてのツックマイヤーが映画に関わっていたことに着目していたかもしれないが、一般の人たちは脚本家に関心を持っていたのだろうか。一方ドイツでは、トーキー映画の始まりと同時に脚本家を評価する土壌ができたのであろうか。

日本とドイツにおけるメディア環境の違いは、ツックマイヤー受容だけではなく、外国映画、西洋の演劇、さらにはメディア全般の問題にも関わってくることに筆者は気が付いた。今後は本稿を基に出版、演劇、映画そしてラジオなどの日本とドイツにおけるメディアの発展とその環境について調べ、ツックマイヤーとメディアの繋がりを再確認していく。そして、全体を比較メディア論的にまとめることで見えてくる日本におけるツックマイヤー受容を研究した博士論文を執筆しようと考えている。

【付記】

本稿は、「明治大学大学院海外研究プログラム」（2017年度）の助成金により参加した「Internationaler Workshop」（2017年6月30日、於バンベルク大学）における発表内容に基づく成果の一部である。

資料 1

＜ カール・ツックマイヤー作品の日本語翻訳一覧 ＞

日本語翻訳 出版年/掲載年	ジャンル	邦題	翻訳者	備考	
	着書名, 出版者 / 所収書, 出版者 / 掲載誌(巻号), 出版者				
	原題, 出版地: 出版者, 出版年				
1926	叙事詩	歩兵	村山知義	雑誌掲載	
	『世界詩人』(第2巻第1号), 世界詩人社 <i>Der Infanterist</i> , In: <i>Das Tribunal</i> , ????, ???? ※1				
1933	戯曲	ケベニツの大尉 ※2	丸山武夫	雑誌掲載	
	『エルンテ』(第5号), 東京帝国大学独逸文学研究会 <i>Der Hauptmann von Köpenick</i> , Berlin: Propyläen, 1931				
1953	戯曲	たのしいブドウ山	加藤衛	選集所収	
	『現代世界戯曲選集 2』, 白水社 <i>Der fröhliche Weinberg</i> , Berlin: Propyläen, 1925				
1954	戯曲	ケベニツの大尉	加藤衛	選集所収	
	『現代世界戯曲選集 第10』, 白水社 <i>Der Hauptmann von Köpenick</i> , Berlin: Propyläen, 1931				
	物語	ある恋の物語	吉田六郎	5作品収録	
	『ある恋の物語』, 河出書房 <i>Eine Liebesgeschichte</i> , Berlin: S. Fischer, 1934				
	物語	輪打ちの話	吉田六郎		
	<i>Die Geschichte von einer Entenjagd</i> , In: <i>Die Geschichte eines Bauern aus dem Taunus und andere Geschichte</i> , Berlin: Propyläen, 1927				
	物語	お産の話	吉田六郎		
	<i>Geschichte von einer Geburt</i> , In: <i>Die Geschichte eines Bauern aus dem Taunus und andere Geschichte</i> , Berlin: Propyläen, 1927				
	物語	タウヌスの百姓の話	吉田六郎		
	<i>Die Geschichte eines Bauern aus dem Taunus</i> , In: <i>Die Geschichte eines Bauern aus dem Taunus und andere Geschichte</i> , Berlin: Propyläen, 1927				
物語	沼の話	吉田六郎			
<i>Die Geschichte vom Tümpel</i> , In: <i>Die Geschichte eines Bauern aus dem Taunus und andere Geschichte</i> , Berlin: Propyläen, 1927					
1957	小説	青い潮: 生と死を支配するもの	桜井正寅	3作品収録	
	『青い潮: 生と死を支配するもの』, 南江堂 <i>Herr über Leben und Tod</i> , Stockholm: Bermann-Fischer, 1938				
	小説	青い潮	中村耕平		独和対訳シナリオ
	『青い潮』, 南江堂 <i>Herr über Leben und Tod</i> , Stockholm: Bermann-Fischer, 1938				
	小説	生死を越えて	吉田六郎		
	『生死を越えて』, 角川書店 <i>Herr über Leben und Tod</i> , Stockholm: Bermann-Fischer, 1938				
	物語	奇跡	吉田六郎		
<i>Die wandernden Hütten</i> , In: <i>Die Neue Rundschau</i> , Herbstheft, 1948					
1965	物語	真実の愛	吉田六郎	選集所収	
	<i>Engeln von Löwen</i> , In: <i>Die Erzählungen</i> , Frankfurt a.M.: S. Fischer, 1952				
1965	戯曲	ケベニツの大尉	杉山誠	選集所収	
	『世界文学大系90』, 筑摩書房 <i>Der Hauptmann von Köpenick</i> , Berlin: Propyläen, 1931				
1967	物語	クリスマスの夜	藤本淳雄	選集所収	
	『世界の文学 第54』, 中央公論社 <i>Eine Weihnachtsgeschichte</i> , Vossische Zeitung, 25. Dezember 1931				
1972	戯曲	悪魔の将軍	加藤衛	選集所収	
	『現代世界演劇 16』, 白水社 <i>Des Teufels General</i> , Stockholm: Bermann-Fischer, 1946				
1974	戯曲	ケベニツの大尉	杉山誠	選集所収	
	『筑摩世界文学大系84』, 筑摩書房 <i>Der Hauptmann von Köpenick</i> , Berlin: Propyläen, 1931				
1980	小説	生と死の支配者	毛利孝一	選集所収	
	『生と死の支配者』, 金剛出版 <i>Herr über Leben und Tod</i> , Stockholm: Bermann-Fischer, 1938				

＜ 検索データベース ＞ (参照日はすべて 2017年9月15日)

国立国会図書館OPAC, URL: <https://ndopa.ndl.go.jp>

国立国会図書館サーチ, URL: <http://iss.ndl.go.jp>

国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ (CiNii), URL: <http://ci.nii.ac.jp>

magazineplus, URL: <http://web.nichigai.co.jp>

Deutsche Nationalbibliothek, URL: <https://portal.dnb.de>

※1 雑誌Das Tribunal は、ツックマイヤーが学生時代に仲間たちと発行していた文学的で政治的な雑誌。創刊は、フランクフルト-アム・マインであったが、後にハイデルベルクで発行した。Vgl. Wagener, Hans: Carl Zuckmayer. München: C.H.Beck, 1983. S. 19-22.

※2 三幕の戯曲であるが、掲載は第二幕で終了している。

資料 2

< カール・ツツクマイヤー戯曲一覧 >

初演年	タイトル	初演日			都市	劇場
		演劇家	俳優	出版地: 出版者、出版年		
1920	Kreuzweg	Ludwig Berger	am 10. Dezember	Berlin		Staatliches Schauspielhaus
1921		Bruno Densch, Heinrich Witte, Annemarie Seidel				München: Kurt Wolff, 1921
1922						
1923	Der Eunuch	Carl Lewenpoock	am 17. April	Kiel		Theater Kiel
		Leitz Huber, Bernhard Minetti, Ernst Fuch				
1923	Kikahan oder Die Hinterwälder	Erich Engel	am 13. Dezember	Berlin		Junge Bühne
					9999	
1924		Potsdam: Gustav Kiopenheuer, 1925				
1925	Pankraz erwacht oder: Die Hinterwälder	am 15. Februar	Berlin			Junge Bühne
		Heinz Hilbert				
		Walter Franck, Rudolf Forster, Alexander Granach				
		Potsdam: Gustav Kiopenheuer, 1925				
1925	Der fröhliche Weinberg	Reinhard Bruck	am 23. Dezember	Berlin		Theater am Schiffbauerdamm
		Eduard von Winterstein, Käthe Hanck, Gred Scherk				
		Berlin: Propyläen Verlag, 1925				
1926						
1927	Schinderhannes	Reinhard Bruck	am 14. Oktober	Berlin		Lessingtheater
		Eugen Klöpffer, Käthe Dorach, Adalbert Schlettow				
		Berlin: Propyläen Verlag, 1927				
1928	Katharina Knie	am 21. Dezember	Berlin			Lessingtheater
		Karl-Heinz Martin				
		Albert Bassermann, Elisabeth Lennartz, Ernst Busch				
		Berlin: Propyläen Verlag, 1928				
1929	Rivalen	am 20. März	Berlin			Berliner Theater in der Königgräzerstrasse
		Erwin Piscator				
		Fritz Kortner, Hans Albers, Felix Bressart				
		Berlin: Arendin, 1929				
1930	Kakadu-Kakada	am 18. Januar	Berlin			Deutsches Künstlertheater
		Gustav Hartung				
		Hans Halden, Elisabeth Lennartz, Fritz Reiff				
		Berlin: Propyläen Verlag, 1929				
1931	Der Hauptmann von Köpenick	am 5. März	Berlin			Deutsches Theater
		Heinz Hilbert				
		Werner Krauß, Paul Wagner, Hermann Vallentin				
		Berlin: Propyläen Verlag, 1930				
1931	Kat	am 1. September	Berlin			Deutsches Theater
		Heinz Hilbert				
		Gustav Fröhlich, Käthe Dorsch, Franz Nicklisch				
		Hamburg: Morton o. J., 1931				
1932						
1933						
1934	Der Schelm von Bergen	Hermann Röbbeling	am 6. November	Wien		Burgtheater Wien
		George Koerner, Hilde Wagener, Ewald Dalsler				
		Berlin: Propyläen Verlag, 1934				
1935						
1936						
1937						
1938	Bellman	am 17. November	Zürich			Schauspielhaus Zürich
		Leopold Lindtberg				
		Karl Paryla, Angelina Arndts, Ernst Ginsberg				
		Char.: A.G. für Verlagsrechte, 1938 *Prima Exemplar				
1939						
1940						
1941						
1942						
1943						
1944						
1945						
1946	Des Teufels General	am 14. Dezember	Zürich			Schauspielhaus Zürich
		Heinz Hilbert				
		Gustav Knuth, Hans Holt, Robert Bichler, Traute Carlsen				
		Stockholm: Bermann-Fischer Verlag, 1946				
1947						
1949	Barbara Blomberg	am 30. April	Konstanz			Deutsches Theater Konstanz
		Heinz Hilbert				
		Angela Söllner, Michael Grubn, Elisabeth Müller				
		Amsterdam: Bermann-Fischer Verlag, 1949				
1950	Der Gesang im Feuerofen	am 3. November	Göttingen			Deutsches Theater Göttingen
		Heinz Hilbert				
		Jens Andersson, Alois Crag, Christine Kayscher				
		Frankfurt am Main und Berlin: S. Fischer Verlag, 1950				
1951						
1952						
1953	Ulla Winbald	am 17. Oktober	Göttingen			Deutsches Theater
		Heinz Hilbert				
		Carl Radtatz, Brigitte Horney, Eugen Dumont				
		Frankfurt am Main und Berlin: S. Fischer Verlag, 1953				
1954						
1955	Das Kalte Licht	am 3. September	Hamburg			Deutsches Schauspielhaus
		Gustaf Gründgens				
		Heinz Reinecke, Joseph Offenbach, Max Eckardt				
		Frankfurt am Main und Berlin: S. Fischer Verlag, 1954				
1956						
1957						
1958						
1959						
1960						
1961	Die Uhr schlägt eins	am 14. Oktober	Wien			Burgtheater Wien
		Heinz Hilbert				
		Peter Mosbacher, Paula Wessale, Ernst Anders				
		Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1961				
1962						
1963						
1964	Das Leben des Horace A. W. Tabor	am 18. November	Zürich			Schauspielhaus Zürich
		Werner Daggelin				
		Gustav Knuth, Marianne Hoppe, Heinrich Gretler				
		Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1964				
1965						
1966						
1967	Kranichtanz	am 8. Januar	Zürich			Schauspielhaus Zürich
		Leopold Lindtberg				
		Hedemarie Hatheyer, Robert Tessen, Gustav Knuth				unveröffentlicht
1968						
1969						
1970						
1971						
1972						
1973						
1974						
1975	Der Rattenfänger	am 22. Februar	Zürich			Schauspielhaus Zürich
		Leopold Lindtberg				
		Helmut Lehner, Christiane Hörbiger, Hans-Gerd Kübel				
		Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1975 (Fischer-Taschenbücher 7023)				
1976						
1977						

< 参考文献 >

Weisbecker, Johannes (Gesamtherstellung): Fülle der Zeit. Frankfurt am Main: S. Fischer, 1956

Wagener, Hans: Carl Zuckmayer. München: C. H. Beck, 1983

Glauser, Barbara: Carl Zuckmayer. Das Bühnenwerk im Spiegel der Kritik. Frankfurt am Main: S. Fischer, 1977

Ott, Ulrich und PDfBn, Friedrich (Hrsg.): Carl Zuckmayer 1896-1977. "Ich wollte nur Theater machen". Marbach: Deutsche Schillergesellschaft Marbach/Necker, 1996, S. 312

Carl Zuckmayer-Gesellschaft e.V. Mainz. URL: <http://carlzuckmayer.de/> (abgerufen am 15. September 2017)

Kiel Sailing City. URL: <http://www.kiel.de/> (abgerufen am 15. September 2017)

参考資料

< カール・ツツクマイヤー 作品一覧 >

	Drama	Prosa	Film	Fernsehfilm	Essay / Rede
1917					
1918		Krinwein (Erzählung)	1918		
1919			1919		
1920	Kreuzweg		1920		
1921			1921		
1922	Der Kümisch	Geschichte von einer Geburt (Erzählung)	1922		
1923	Kältahan oder Die Hinterwäldler	Die Geschichte von einer Entensagd (Erzählung)	1923		
1924			1924		
1925	Pankras erwacht oder der Hinterwäldler Der fröhliche Weinberg	Sitting Ball (Erzählung) Die Geschichte eines Bauern aus dem Taunus (Erzählungen)	1925		
1926		Die Geschichte von Tümpel (Erzählung)	1926	Quälen der Nacht	
1927	Schinderhannes		1927	Der fröhliche Weinberg	
1928	Katharina Knie		1928	Der Schinderhannes	
1929	Rivolen		1929	Katharina Knie	
1930	Kaksadu Kaksada!		1930	Der Blaue Engel	
1931	Der Hauptmann von Köpenick Kat	Eine Weihnachtsgeschichte (Erzählung)	1931	Der Hauptmann von Köpenick	
1932		Die Affenhochzeit (Erzählung)	1932		Gehart Hauptmann (Rede zu seinem niedrigsten Geburtstag)
1933			1933		
1934	Der Schein von Bergen	Eine Liebesgeschichte (Erzählung)	1934		
1935		Schwärze oder Die Magdalena von Bozen (Roman)	1935	Escape me Never	
1936			1936	Rembrandt	
1937		Ein Sommer in Österreich (Erzählung)	1937		
1938	Musik und Leben des Carl Michael Bellman	Pro Domo (Autobiographie) Herr über Leben und Tod (Roman)	1938		
1939			1939	Boefje	
1940		Second Wind (Autobiographie) Das Herz der Könige (Erzählung)	1940	De Mayerling à Sarajevo	
1941			1941	Somewhere in France	
1942			1942		
1943			1943		
1944			1944		Carlo Mierendorff. Porträt eines deutschen Sozialisten (Gedächtnisreden gesprochen am 12. März 1944 in New York.)
1945		Der Seelenbesitz (Erzählung)	1945		
1946	Das Teufel General		1946		
1947			1947		
1948		Die wandernden Hütten (Erzählung)	1948		Amerika ist anders (Rede) Die Betrüder Grimm: Ein deutscher Beitrag zur Humanität (Essay)
1949	Barbara Blomberg		1949	Nach dem Sturm	
1950	Der Gessing im Feuerofen		1950		
1951			1951		
1952		Engeln von Löwen (Erzählung)	1952		Die langen Wege (Rede)
1953	Ulla Wundald oder Musik und Leben des Carl Michael Bellman		1953		
1954			1954	Eine Liebesgeschichte	
1955	Das kalte Licht		1955		Das kalte Licht
1956			1956	Der Hauptmann von Köpenick	Der kleine Friedländer The Cold Light
1957			1957		Ein Blick auf den Rhein (Rede zur Verleihung des Ehrenbürgerrechts der Universität Bonn)
1958			1958	Der Schinderhannes	
1959		Die Fastnachtabsichte (Erzählung)	1959	Herbert Engelmann	Ein Weg zu Schiller (Rede)
1960			1960	Der Hauptmann von Köpenick	
1961	Die Uhr schlägt eins		1961	Der fröhliche Weinberg	
1962			1962		
1963			1963		
1964	Das Leben des Horace A. W. Tabor		1964		
1965			1965		
1966		Als wär's ein Stück von mir (Autobiographie)	1966		
1967	Kranichtanz		1967		
1968			1968	Schinderhannes	
1969			1969	Rembrandt	
1970		Auf einem Weg im Frühling (Erzählung)	1970		
1971			1971		
1972		Hennsdorfer Pastoral (Erzählung)	1972		
1973			1973		
1974			1974		
1975	Der Flottenfänger		1975		
1976			1976	Die Fastnachtabsichte	Aufruf zum Leben (Ereignisanalyse)
1977			1977		

< 参考文献 >

Ayck, Thomas: Carl Zuckmayer. Einbck bei Hamburg: Rowohlt, 1977

Bopp, Ursula und Staudt, Frieder: Carl Zuckmayer und Nockenheim (Nockenheimer Heimatbündische Schiffschau, Heft 17), Nockenheim Heimat- und Verkehrsverein Nockenheim e.V., 1998

Die Aktion Nr. 49/50 (15.12.1917), Sp.661-662. (Nachdruck). In: Die Aktion 1917 / 1918. 7. Jahrgang 1917, 8. Jahrgang 1918 mit Kommentaren von Paul Raabe. München: Kösel-Verlag, 1967

Wagener, Hans: Carl Zuckmayer. München: C.H.Beck, 1983

Zuckmayer, Carl: Meistererzählungen. Frankfurt am Main: S.Fischer, 1960

Carl-Zuckmayer-Gesellschaft e.V. Mainz, URL: <http://carl-zuckmayer.de/> (abgerufen am 15. September 2017)